

前号を読んで

授業評価についての雑感

濱口佳和

人間総合科学研究科助教授

前号は教育評価の特集号で、ファカルティ・ディベロップメント一環としてのカリキュラムや授業評価をめぐって、様々な提言や実践例の紹介がなされていた。これらの記事を読むにつけ、現今の大学教育への要求が、自分が学生だった20年程前と比べると、比較にならないほど高くなっていることを感じると同時に、今の学生達に対して羨望の念を抱かずにはいられなかった。

それはさておき、私はかねてから、評価主体である学生の質は、授業評価の成否を分ける重要な要因のひとつと考えてきた。学習意欲や問題意識の高い学生からの率直な意見は授業を高める上で参考になるであろうが、逆のタイプの学生からの注文は、かえって授業内容の質的低下を招く恐れもあるからである。心理学系の服部先生がなさった「授業の総合的評価と推薦度に対する授業評価尺度による多変量回帰予測」の結果は、評価主体に対する上記の筆者の疑

念をかなり払拭していただけるものであった。これによると本学の学生達は、知的刺激を受け、知識の獲得に貢献し、他の授業にも役立つような内容から構成されている授業を高く評価するということである。これは学習者として極めて健全な反応で、本学学生の質の良さに改めて感じ入った次第である。私は学生による授業評価に若干の疑念を抱いていたが、こうした学生達からの評価であれば真摯に受けとめねばという思いを新にした。

また、生物学類長の林先生が、卒業研究こそ授業評価の対象とすべきというご意見を述べられていたが、私も同感である。学類のみならず修士・博士課程の論文指導には、より質の高い研究、より完成度の高い論文を目指して、多くの時間と労力が費やされている。学生もまた、学習の総仕上げとして取り組んだ研究の指導の善し悪しが評価の対象にならないのは、片手落ちと感じているのではないだろうか。

授業評価には様々な方法があろうが、最終的には学生と教官双方の良質な研究の産出に寄与するものであってほしいと願う今日この頃である。

(はまぐち よしかず/発達臨床心理学)